

カフカの『判決』(1)

—二つの自己の闘い—

佐々木 博康

Kafkas *Das Urteil* (1)

—Der Kampf zwischen den zwei Ichs—

SASAKI, Hiroyasu

大分大学教育学部研究紀要 第41巻第1号

2019年9月 別刷

Reprinted From

RESEARCH BULLETIN OF THE

FACULTY OF EDUCATION

OITA UNIVERSITY

Vol. 41, No. 1, September 2019

OITA, JAPAN

カフカの『判決』(1)

—二つの自己の闘い—

佐々木 博 康*

【要 旨】 本稿はカフカの『判決』を取り扱い、この作品が主人公ゲオルクの意識的自己と、無意識内にあるもう一つの自己との闘いを描いたものであることを示す。また、この二つの自己の闘いが、作者カフカ自身の生きる上での葛藤を表現していることを明らかにする。物語の前半におけるロシアの友人に対するゲオルクの見方から、彼の価値観がわかる。ゲオルクが何よりも重視するのは社会的成功である。自分は社会的ヒエラルヒーの階段を昇っていくことに努める一方、このヒエラルヒーの下位にある存在は見下す。物語の後半、父親の部屋を訪れたゲオルクは、父親から自分の生き方を徹底的に批判される。この部分はゲオルクの幻想である。現在の生き方に対するゲオルクの疑念がこのような幻想を生み出している。ゲオルクの無意識に潜むもう一つの自己が自己主張しているのである。

【キーワード】 ヒエラルヒー 自己欺瞞 合理化 無意識

はじめに

筆者は「カフカ『判決』の物語構造」¹⁾において、この物語の前半が物語内の現実であるのに対して、後半が主人公ゲオルクの幻想であることを明らかにした。主人公はロシアの友人に自分の婚約を知らせる手紙を書いた次第を回想している。回想を終えたゲオルクは実際には父の部屋に行かず、依然として自室の机の前で窓の外を見ながらもの思いにふけている。そして、自分が父の部屋に入っていくありさま、そこで激しく非難、罵倒され、父から死刑宣告を受け、それに従って自分が死んでしまうありさまを空想しているのである。

ではなぜゲオルクはこのような幻想を見るのだろうか。これについて考えることは作品のテーマを捉えることにもつながる。本稿では、まず前半のゲオルクの回想を分析することで彼の現在の生き方を考察する。次いで後半のゲオルクの幻想の内容を分析することによって、ゲオルクの幻想が彼の生き方とどのような関係にあるのかを見ていく。最終的に物語のテーマを明らかにすることが目的である。

令和元年 5 月 31 日受理

* ささき・ひろやす 大分大学教育学部言語教育講座 (ドイツ文学)

1. ゲオルクの友人への対し方

前半はなぜロシアの友人に婚約のことを知らせる手紙を書くに至ったかについてのゲオルクの回想となっている。ロシアの友人とのこれまでの関わり、婚約者との対話、ゲオルクが友人に書いた手紙の三つの部分から成る。物語の流れに沿ってゲオルクの考え方やふるまいを分析し、その人物像を見ていく。

ゲオルクによれば、幼なじみの友人は故郷の町で「仕事を続けていくことを不満に思っ」(43) ²⁾、「逃げるように」(43) ロシアに行ってしまった。ロシアで始めた商売も「もう長らく行き詰まっている」(43) ようである。顔色から見ると病気のようにも見える。現地の同国人たちとも、またロシア人たちとも交際はない。結婚して家庭を持つ気もないようである。ロシアの友人は、順風満帆な人生を歩んでいるゲオルクとは対照的である。

ゲオルクはこの友人を次のように見ている。

そのような男に（手紙で——引用者補足）何を書けるだろうか。明らかに道はずれてしまった男で、気の毒に思うことはできるが助けることはできない。再び郷里に戻って来るようにと忠告すべきだろうか？（……）しかしそうすることは同時に、彼に次のように言うことに等しい。つまり、君のこれまでの試みは失敗したのだ、いい加減そんなことはやめるべきだ、君は戻ってこなければならぬ、出戻りとしてこれからずっとみんなに好奇の目で見られることになるだろうが、君の友人たちだけは事情を知っている、君は大きな子供なのだから、郷里にとどまり成功を収めた友人たちの言うことを聞かなければならぬんだ、と。いたわるように言えば言うほど彼を傷つけることになるだろう。（……）そもそも郷里に呼び戻すことさえ成功しないかもしれない。（……）でも、彼が実際に助言に従い、郷里で意気消沈して（……）暮らし、友人たちの中に居場所を見つけられず、しかも友人たちなしではやっていけないとしたらどうだろう。屈辱を感じ、今度は本当に故郷も友人たちも失ってしまうとしたら。それなら今までどおり異郷にとどまるほうが彼にとってはずっとよいのではないだろうか？（44f.）

ゲオルクは、ロシアの友人を「明らかに道はずれてしまった男で、気の毒に思うことはできるが助けることはできない」人間であると見なしている。故郷に戻ってくるよう友人に忠告することは彼を傷つけることになる、戻ってきても逆に「屈辱」を感じるだろう、それなら帰ってこない方がいい、と考える。「そのような男に何を書けるだろうか」という反語的な問いが、ゲオルクの友人への対し方の結論となっている。彼に手紙で書けることはないのである。それゆえ、ゲオルクは、彼とは「本当の意味でのやりとり」(45) はできないと考え、これまで「いつもただ意味のない出来事についてだけ」(46f.) 書いてきた。

ロシアの友人への見方、対し方からゲオルクの価値観がわかる。ゲオルクが重視するのは社会的成功である。商売の発展と結婚による社会的地位の確立が何よりも優先される。自分のことを「郷里にとどまり成功を収めた友人たち」の一人と見なす一方、友人については「明らかに道はずれてしまった男」と決めつけている。商売に失敗したものは、それだけで人生の敗残者であり、軽蔑に値する存在となる。結婚することもまた社会的成功であり、独身であることはそれだけで否定的なことである。結婚は社会的上昇の足がかりでもある。婚約者がどのよ

うな人物であるかを伝えるのにゲオルクが使うのは「裕福な家の娘」(47)という属性だけである。

ゲオルクの頭の中には社会的ヒエラルヒーが厳然と存在している。ゲオルクはその階段を昇っていくことに努める一方、下位にある存在は見下す。社会的ヒエラルヒーに束縛された思考しかできないので、友人に自分の商売の成功や婚約のことを伝えようと、自分をうらやみ、「屈辱」を感じるに違いないと思うのである。ただ、ゲオルク自身は友人に対する自分の態度を思いやりからであると思っている。ここに自己欺瞞がある。助けることができないのだから、何も言わない方がいい、従って表面的な関わり合いでとどめるしかないというのがゲオルクの論理である。しかし、実際にはゲオルクは挫折した友人とはもう関わりを持つ必要性がないと思っている。自分の商売の成功のことを黙っているし、母の死についても知らせていない。今また、婚約のことさえ伝えないでおこうとしている。プライベートな関係を持つとうとしていない。

ロシアの友人とのこれまでの関わりをふり返った後、ゲオルクは友人に関して婚約者で行った会話を思い出す。ゲオルクは婚約者に、ロシアの友人に婚約のことを知らせないと伝えたのである。婚約者は「私があなたのお友達みんなと知り合いになりたいと思うのは当然じゃないかしら」(47)と言ったり、「その方、私たちの結婚についてどこかから聞いたりしないかしら」(47f.)と言ったりして、その友人を結婚式に招くことを求めるが、ゲオルクはあれこれ言い逃れする。婚約者はついに、「そんなお友達がいらっしゃるのなら、ゲオルク、あなたは婚約なんかしなきゃいけなかったのよ」(48)と強い口調で不満を訴える。するとゲオルクは、「うん、それ(婚約——引用者注)は僕たち二人の罪だよ。でも婚約しないほうがよかったなんて今も思わないよ」(48)と言う。テーマをロシアの友人の件から自分たちの愛の方にずらすことで、婚約者をなだめようとするのである。そして恋人にキスを浴びせて、すべてをうやむやにしようとする。しかし婚約者は「何度もキスされて息を切らしながら」(48)も、「でも私は嫌だわ」(48)とあくまで自分の考えを主張する。

婚約者にそこまで強く求められたゲオルクは、「友人にすべてを書いても実際たいしたことじゃない」(48)と思い直す。

「これが僕なんだから、このままの僕を受け入れてもらわなくちゃ」と彼は思った。「自分を偽って、実際以上に彼との友情にふさわしい人間のふりをすることはできない。」(48)

この発言に読者は驚く。それまで友人とは心からの交際はできないと考えていたはずのゲオルクが突然考えを変えるからである。「自分を偽って」友人のふりをしてきたのがこれまでのゲオルクなのに、ここではロシアの友人が本当の友人ならありのままの「僕」を受け入れるべきだと要求している。ゲオルクの傲慢さと身勝手さが感じられる。

一方にはロシアの友人とのこれまでの関係がある。他方には婚約者との新しい関係がある。両者が衝突したとき、ゲオルクが選ぶのは社会的上昇を果たすためにより有益な方、つまり婚約者との関係の方である。自分がそのような選択をしているにもかかわらず、ゲオルクはそれを、互いにありのままの姿を認め合うのが「友情」だという正論で糊塗している。ここにも自己欺瞞が見られる。

前半の終わりでは、ゲオルクがロシアの友人に書いた手紙の一部がそのまま引用される。友人に結婚式への参列を望んでいることを述べつつ、それが相手の負担にならないように、「でも

どうなるにせよ、何も気にせず、君のいいように行動してくれたまえ」(49)と友人の側に選択の余地を残している。一見すると友人を慮るやさしい手紙のように見えるが、気になる点も散見される。友人に書いたのは「長い手紙」(48)なのに、婚約については末尾で補足的に述べられるだけである。親密な友人関係であれば、婚約のことこそ真っ先を書くべき事柄のはずである。また、相手が一番知りたいであろう婚約者のことについても、「裕福な家のお嬢さん」(48)と書くだけでほとんど何も伝えていない。婚約のことを手紙の末尾で書いたことについては、「一番のニュースを僕は最後まで取っておいた」(48)と、また婚約者について語らないのは「詳しいことを伝える機会はまだあるだろうから」(48)と如才ないが、手紙を受け取った方は親しみを感ぜないだろう。

結婚する自分の気持ちについては、「本当に幸せである」(48)とあっさり述べるだけである。それよりはこの婚約によって、「君と僕の関係」(48)がどうなるかに筆を費やしている。婚約したからといって君との関係はほとんど「何も変わっていない」(48)、それどころか君に「僕の婚約者という誠実な友人が一人できる」(49)ことは「独身の君にとってはまったく意味のないことではないだろう」(49)と書く。ゲオルクは婚約がもたらす社会的位置づけの変化が何よりも気になるのである。独身でいることと結婚していることでは社会的評価が大きく異なると考えているゲオルクは、結婚によって自分が友人より優位な立場に立つことを気にかけている。婚約したからといって自分たちの関係は「何も変わっていない」とわざわざ言うのはそのためである。それどころかゲオルクは、自分の婚約が独身の友人に有利に働くかもしれないと付け加えている。女性の友人ができることで、ロシアの友人にも結婚の可能性が広がるからである。

ゲオルクが友人に結婚式への参列を強く求めず、断る余地を残しているのは、やさしさのように見えて、実際には友人に帰ってきてもらいたくないと考えているからである。商売に成功し恵まれた結婚をする自分と、商売に失敗し独身のままである友人とは、社会的に大きな格差がある、それゆえ結婚式に來れば友人は自分を「うらや」(47)み、「不満を感じる」(47)に違いないとゲオルクは思うのである。

以上、ゲオルクがどのような考え方をし、どのような生き方をしている人物かを見てきた。後半ではこのような考え方、生き方が、父親によって徹底的に批判されるさまを見ていく。

2. ゲオルクの父親への対し方

後半は、ゲオルクが穏やかに父親と話す場面、父親が突然ゲオルクを罵倒する場面、そしてゲオルクが父の部屋を飛び出し川に飛び込んでしまう場面の三つに分けられる。すでに述べたように、後半はすべてゲオルクの幻想である。ロシアの友人への手紙を書き終えたゲオルクは依然として机の前に座っており、窓の外を眺めながら自分が手紙を持って父の部屋に入っている姿を空想しているのである。

まず、ゲオルクが父親と話す場面を見てみよう。ここは幻想とは言っても、夢の始まりがそうであるように、まだ現実的な雰囲気が優勢である。

ゲオルクは手紙を持って父の部屋を訪れ、ロシアの友人に婚約を知らせることにしたと報告する。父親の部屋に入るゲオルクについて、次のように語られている。

彼はもう何ヶ月もそこに入ったことがなかった。もっとも特にその必要はなかった。とい

うのも、父とは絶えず店で会っていたからだ。昼食は同じ時間に同じ食堂で取った。晩には互いに好きに過ごした。たいていはそれぞれが新聞を読みながらではあるが、少しの間、共通の居間に座っていた。ただゲオルクが、頻繁に起こることではあったが、友人たちと会ったり、あるいはこのところのように婚約者を訪問しているときは別である。(49)

ざっと読んだところでは、ここに何か問題があるようには見えない。しかしそれは、これが問題を感じていないゲオルクの思考だからである。細かく見ていくと、作者が読者にそれとなくゲオルクと父親の関係の真実を知らせていることがわかる。父の部屋に「もう何ヶ月も」入ったことがなかったと述べられた後、すぐに「もっとも特にその必要はなかった。というのも父とは絶えず店で会っていたからだ」と緩和される。「晩には互いに好きに過ごした」という言い方は肯定的な印象を与えるが、「たいていはそれぞれが新聞を読みながら」と続いており、互いにほとんど言葉を交わしていないことがわかる。「少しの間、共通の居間に座っていた」とされるが、すぐに訂正される。実際にはゲオルクは友人たちや婚約者のところに「頻繁に」出かけているのである。ゲオルクと父親との間には表面的な関わりしかなくなっていることがわかる。しかし、ゲオルクは必ずしも父親との関わりに問題を感じていない。自己欺瞞的な思考によって問題を意識することを避けているのである。

父親とのコミュニケーションの欠落は、ゲオルクと父親の最初の会話からも見てとれる。

「ここは耐えがたいほど暗いですね」と彼は言った。

「ああ、確かに暗い」と父は答えた。

「窓も閉めてるんですか？」

「そのほうが好きなのだ。」

「外はかなり暖かいですよ」とゲオルクは、自分の言葉につけ足すように言って座った。

(50)

ゲオルクは、部屋は明るい方がいいし、また外は暖かいのだから窓を開けたほうがいいと思っているが、父親は暗い部屋を好み、窓も閉めたままにしておきたいと思っている。しかし、ゲオルクは父がどう思っているかにはまったく注意を払っていない。ゲオルクが最後に「外はかなり暖かいですよ」と言ったとき、「自分の言葉につけ足すように」と表現されている。「そのほうが好きなのだ」という父の言葉をゲオルクがほとんど聞いていないことを、作者は読者にそれとなく知らせている。ゲオルクは自分の考えだけにとらわれている。最初の「耐えがたいほど」もそうであるが、婉曲ながら自分の考えを相手に押しつけている。

ロシアの友人に手紙を書いたことを伝えたゲオルクに対して、父親は「おまえは本当にペテルブルクにそんな友達がいるのか」(52)と言い出す。父が友人と話したことも知っているゲオルクは「当惑」(52)する。高齢のために父の頭がすっかり弱ってしまったのだとゲオルクが考えたことは次の引用からわかる。

「僕の友達のことはおいておきましょう。千人の友人もお父さんの代わりにはなりませんよ。僕の考えを言いましょうか？ お父さんはもっと自分をいたわらないといけません。ただ、年をとるのはやむをえないことです。店がお父さんなしでは回っていかないことは

お父さんもよくご存じのとおりです。でも商売がお父さんの健康を脅かすのであれば、僕は明日にでも店を永遠に閉めてしまうでしょう。それはできません。だからお父さんの生活の仕方を変えなければなりません。(……) いや、お父さん！ 医者呼びましょう。そしてその処方に従うのです。部屋を取り替えましょう。お父さんが表側の部屋に移り、僕がここに来ます。(……) でもこういったことをすべてするには時間がかかります。今は少しベッドに横になってください。休息が絶対必要なのです。さあ、着替えを手伝いましょう。僕にもできますよ。」(52f.)

全体として、いかにも孝行息子の言葉のように響く。しかし注意してみると、必ずしもそうとは言えないことがわかる。「僕の友達のことはおいておきましょう。千人の友人もお父さんの代わりにはなりませんよ」は、誇張が過ぎて口先だけの言葉にも感じられる。「お父さんはもっと自分をいたわらないといけません」と、さも健康を気づかっているかのような言い方をしますが、すぐに「ただ、年をとるのはやむをえないことです」と続けており、体が弱るのも仕方のないことだと思っていることがわかる。「商売がお父さんの健康を脅かすのであれば、僕は明日にでも店を永遠に閉めてしまうでしょう」と、驚くような発言をする。しかしすぐに「それはできません」と打ち消しており、単なる修辭的な発言にすぎなかったことがわかる。ゲオルクはさらに、医者呼びましょう、部屋を自分のものと取り替えましょうとたたみかけるように言うが、「でもこういったことをすべてするには時間がかかります」と付け加える。すべては空約束に終わる可能性が強い。結局、ゲオルクが実際に行うのは父の着替えを手伝い、ベッドに横たえることだけである。

ゲオルクの大仰な発言を見ると、どうしても「巧言令色、少なし仁」という言葉が思い浮かんでしまう。ゲオルクは一見、孝行息子のように見えるが、実際には孝行息子を演じているだけである。ただ、ゲオルク自身はこのような自己欺瞞に気づいていない。

ゲオルクが父の着替えを手伝うところを見てみよう。

この間、ゲオルクは父を再び座らせ、リンネルのパンツの上にはいているメリヤスのズボン下と靴下を注意深く脱がせることに成功していた。あまり清潔ではない下着を目にしたときには、父をなおざりにしてきたことで自分を責めた。父の下着交換に気を配るのもきっと自分の義務だったろう。(54)

ここを読む読者は、やはりゲオルクは父親思いだったと思い直すかもしれない。しかし、「父の下着交換に気を配るのもきっと自分の義務だったろう」という文は接続法の非現実話法で書かれており、過去のしなかった行為への悔いを表してはいるが、今後そうすることを現実性をもって語るものではない。さらに、「きっと(sicherlich)」という副詞が逃げ道を用意している。今後何もしない可能性のほうが強いのである。結局、父親を「なおざりにしたことで自分を責める」のも、ゲオルクの自己欺瞞的な思いにすぎない。それによってゲオルクは自らを孝行息子に仕立て上げ、そのような自分に満足しているのである。

上の引用に続く文章でも同じことが言える。

父の将来をどうするかについては、まだはっきり婚約者と話し合ったことはなかった。し

かし二人とも暗黙のうちに、父がこの家に一人で残すものと決めてかかっていた。しかし今、即座に、父を新居に連れていくことを固く決心した。よくよく確かめてみれば、そこで父に提供されることになる介護も手遅れかもしれなかった。(54f.)

結婚後、父親を家に一人で残すことは普通のことと言える。しかし、「父を新居に連れていくことを固く決心した」という言葉には嘘があるだろう。このような重大なことを、婚約者に相談もせず、「即座に (kurz)」決めてしまうことができるはずがない。また、「固く決心した」の「固く」も原文では"mit aller Bestimmtheit"となっており、最高度に強められているが、これは「千人の友人もお父さんの代わりにはなりませんよ」と同じ類いの誇張だろう。実際すぐに、「よくよく確かめてみれば、そこで父に提供されることになる介護も手遅れかもしれなかった」と続いており、新居に連れていってもおそらく手遅れだろうから、どこか施設に入れることになるだろうというのが、おそらくゲオルクの隠された本音なのである。

後半第一部の終わりは、ベッドに横たわった父親とゲオルクの会話となっているが、ここでもコミュニケーションの齟齬が見られる。会話だけを取り出してみよう。最初の台詞が父親のものである。

「これでちゃんとくるまれているか？」

「やはりベッドが気持ちいいでしょう」

「ちゃんとくるまれているか？」

「ゆっくり休んでください。ちゃんとくるまれていますよ。」(55)

父親が「ちゃんとくるまれているか」と尋ねるが、ゲオルクはそれには直接答えない。「やはりベッドが気持ちいいでしょう」は、父にベッドに横になることを勧めた自分の提案が正しかったことを確認しようとしているだけである。父親が同じ質問をしたときによくゲオルクは答えを返す。ただその場合も、最初に言うのは「ゆっくり休んでください」という自分の言いたいことであって、父への返答は付け足しのようにになっている。

ゲオルクの父親に対する対し方は、ロシアの友人に対する対し方と共通している。ゲオルクはロシアの友人や父親と表面的な関係しか持とうとしていない。にもかかわらず、ゲオルク自身は、自分は友人のことを思いやっている、父親の心配をしていると思い込んでいる。このような自己欺瞞の背後にあるのは、友人は商売に失敗したのだからしょうがない、父親は高齢なのだからどうしようもないという「合理化」³⁾である。このようなゲオルクの考え方や人との関わり方の根本にあるのは、社会的ヒエラルヒーにおいて上昇をめざすことを何よりも重視するゲオルクの生き方である。社会的ヒエラルヒーとは要は権力的ヒエラルヒーである。ゲオルクは自己欺瞞によってごまかしているが、結局は、挫折した友人や高齢化した父親を権力的ヒエラルヒーの下位にある存在と見なしているのである。

3. 父親からの非難

(1) 父親の非難とその妥当性

「ちゃんとくるまれているか」という問いに対し、ゲオルクが「ちゃんとくるまれています

よ」と答えると、父親は「そんなことはない (Nein)」(56) と叫び、「ベッドの上にすつくと立ち上が」(56) る。そして「おまえはわしをくるみ込もうとした。(……) だが、まだくるみ込まれないぞ」(56) と言って、ゲオルクに向かって激しい怒りをぶつけてくる。ここから後半の第二部となる。

父親の怒りの噴出はすさまじい。ゲオルクを非難し、罵倒し、最後には死刑まで宣告する。しかし、これらはすべてゲオルクの幻想、白昼夢である。この悪夢の中にある核となる部分を見る必要がある。父親が何を批判しているのかを整理し、それが正当なものなのかを検討してみよう。

父親はまず、ロシアの友人に対するゲオルクの欺瞞的態度を非難する。

「おまえの友達をよく知っているとも。あれならわしの心にかなう息子だ。だからおまえはあの男を何年にもわたってだまし続けてきたんだ。凶星だろう？ わしがあの男のことを思って泣かなかったと思うか？ だからおまえは仕事部屋に閉じこもった。入るべからず、上司は仕事中说って——ただロシアに偽りの手紙を書くためだけに。(……) おまえは、オヤジをやっつけてやった、尻に敷いてしまったのもう動けまいと思った。わが息子殿はそれで結婚をお決めになったわけだ！」(56)

それまで知らないと言っていたゲオルクの友人を「よく知っている」と言い、「あれならわしの心にかなう息子だ」とまで述べて、目の前にいる実の息子を否定する。そしてゲオルクが友人に「偽りの手紙」を書いて「何年にもわたってだまし続けてきた」と責める。「オヤジをやっつけてやった」というのは、ゲオルクが商売上の実権を自分から奪っていることを言っている。

続いて非難は、ゲオルクの結婚に向かう。

「だってスカートを持ち上げたんだもの」と父は甘ったるい声で言った。「だってスカートをこんなふうを持ち上げたんだもの、あの嫌らしいガチョウめが。」実演してみせるために、自分の寝間着をまくり上げたので、戦争で受けた太ももの傷の跡が見えた。「だってスカートをこんなふうに、こんなふうに、こんなふうを持ち上げたんだもの。だからおまえはあの女に近づいた。誰にも邪魔されずにあの女と楽しむために、おまえはわしらの母さんの思い出を汚し、友達を裏切り、父をベッドに押し込めた。動けないようにと。」(57)

父親の演技はすさまじく、読者も唖然となる。ゲオルクが結婚するのは性的欲望に突き動かされてのものと主張し、婚約者まで侮辱する。「母さんの思い出を汚し」というのは、ゲオルクが母の死を十分に悼んでいないという非難である。自分は妻の死に大きなショックを受け、いまだにそれを引きずっているのに、ゲオルクの方はさっさと母のことは忘れて結婚しようとしていると批判している。

父親の最大の不満は自分に対するゲオルクの態度である。

「さあ言ってみろ (……) わしに何ができるというんだ？ こんな奥の部屋に押し込められ、裏切り者の店員たちに見張られ、骨まで老いぼれて？ 一方、わが息子殿は小躍りしながら浮かれ歩き、わしが道をつけてやった仕事の契約をまとめ、満足しきってとんぼ返

りをしてござる。だが父の前はよそよそしい紳士づらで素通りだ！」(58)

父親は、家では「奥の部屋」に押し込められているし、店でもゲオルクが店員たちを手なづけ、自分を見張らせていると批判する。また、ゲオルクが自分の仕事の成果を横取りし、有頂天になっていると非難する。

これらの父親の非難は当たっているだろうか。まず、ロシアの友人に対するゲオルクの態度について見てみよう。ゲオルクは友人を「明らかに道はずれてしまった男」とみなし、「気の毒に思うことはできるが助けることはできない」と決めつけ、手紙で「本当の意味でのやりとり」はできないとして、「いつもただ意味のない出来事についてだけ」書いている。友人に対するゲオルクの態度は、確かに欺瞞的であると言えないこともない。しかし、「何年にもわたってだまし続けてきた」という非難は強すぎるようにも思われるし、「偽りの手紙」を書くためだけに「仕事部屋に閉じこもった」という発言となると妄想に近いものがある。

また、結婚についての父親の非難は的はずれであるように思われる。ゲオルクに性的欲求がないことはないだろうが、婚約者について二度も「裕福な家の娘」とであると述べていることを考えると、結婚は社会的地位の安定、そして商売に有利になるという功利性の側面が強いだろう。性的欲求のための結婚という非難は読者には言いがかりとしか思えない。それに、結婚が母の思い出を汚すことになるなどという批判は、甚だしい論理の飛躍である。

さらに、父親に対するゲオルクの態度についてはどうだろうか。ゲオルクは、父親が商売から身を引くようになったために自分の能力が発揮できるようになり、商売が発展したのだと考えている。父親が持っていた商売の実権を完全に自分の手にしたいという思いは明らかにゲオルクにはある。しかし、「オヤジをやっつけてやった、尻に敷いてしまったのもう動けまい」とまで思っているかは疑問である。ゲオルクは意識の上では父親を尊重しているつもりなのである。

このように、父親の非難には極端な歪曲があり、妄想に近いものがある。しかし、これらの非難がゲオルクの痛いところを突いているのも確かである。父親が批判するのはゲオルクの自己中心性である。ゲオルクは商売の成功に浮かれ、「裕福な家の娘」との婚約も決まって自分の人生は順風満帆であると思っている。成功者意識に酔っていると言ってもいいだろう。一方で、友人や父親や母親については自分中心の世界観において取るに足りない周辺的存在だと見なしている。父親が非難するのはそのようなゲオルクのものの見方である。父親の言葉がいかに誇張され、いかに荒唐無稽なものであるにしても、その核心にあるゲオルクの自己中心的な生き方への批判は正当であると言える。

(2) 二つの自己の闘い

何度も述べているように、これらはすべてゲオルクの幻想であり、白昼夢である。ではゲオルクはなぜこのような自己批判的な幻想を見るのだろうか。それはゲオルクの心の奥底に、現在の自分の生き方に対する疑念があるからにほかならない。確かに成功を収め、「裕福な家の娘」との結婚も決まった、今後も社会的ヒエラルヒーの上昇をめざして生きていこう、しかし、本当にそれでいいのだろうか。このような疑念である。ゲオルクは意識の上では、自分の人生はこれでよい、自分の考え方は間違っていないと思い込もうとしている。商売に失敗した友人はもう救いようがない、父親はもう年だから商売の実権を自分に譲ってもいいはずだ、父のよ

うにいつまでも母親の死に拘泥しては商売ができない——ゲオルクはこのような心理的「合理化」を行っている。しかし心のどこかでは、このような「合理化」に疑念を感じているのである。意識的にはそれを振り払って生きているが、無意識の中にそれがある。

父親の非難のもとになっているのは、ゲオルクが意識から遠ざけてきたものである。自分は友人を見捨てているのではないか、父親を商売から遠ざけ、その権力を奪い取ろうとしているのではないか、母の死にそれほどショックを受けていなかったのではないか。ここに自分は性的欲求に突き動かされて結婚するのではないかという疑念を加えてもいいだろう。ゲオルクが意識から排除してきたこれらの疑念が、後半の幻想において一気に噴出している。父親からの非難という形であふれ出している。つまり、ゲオルクの幻想の中の父親とは、ゲオルクの無意識が人格化されたものである。ゲオルクのもう一つの自己が父親の姿で登場し、現在のゲオルクの生き方を徹底的に否認する。すなわちこの物語は、ゲオルクの二つの自己の闘いを描いたものなのである。

では、現在の生き方を否定するゲオルクのもう一つの自己とはどのような存在なのだろうか。物語にその示唆はあるだろうか。父親はゲオルクに向かって、「わしはこの地における彼の（ロシアの友人の——引用者注）代理人（Vertreter）だったのだ」（57）と叫ぶが、これがヒントになる。つまり、父親の背後にいるのはロシアの友人であり、それがゲオルクの第二の自己である。

物語全体がゲオルクの視点から描かれているので、ロシアの友人の生き方についてははっきりとはわからない。しかしゲオルクと対照的な生き方をしていることは確かである。ゲオルクが大事にするのは、故郷、商売、そして結婚も含めた人との交際である。故郷にとどまり、商売の売り上げを増大させ、しかるべき女性と結婚して社会的地位を安定させることが人生の目標である。ゲオルクの生き方の根本原理は既存の社会的ヒエラルヒーにおける上昇である。ところがロシアの友人はゲオルクとはまったく逆である。故郷、商売、結婚を重視していない。

友人は何年も前に故郷を去り、ペテルブルクで商売をしている。友人が故郷の町を離れたことについて、ゲオルクは否定的な見方をしている。物語の初めでゲオルクは、友人は「この町で仕事を続けていくことを不満に思っ」、「それこそ逃げるようにロシアに行ってしまった」と回想している。ところが物語の後半でこれがゲオルクの思い込みであることが明らかになる。父親がおまえは友人をだましていると非難し始めたとき、ゲオルクは友人の姿を思い浮かべ、「どうして彼はそんなに遠くに行ってしまうなけりばならなかつたのだろう」（56）と自問する。この言葉は、ゲオルクが実際には友人が故郷の町を去った理由を知らなかつたことを暴露している。友人は故郷の町に対する不満とは別の関心からロシアに行った可能性があるのである。

商売についてはどうだろうか。ゲオルクは、友人の商売は「もう長らく行き詰まっている」と見ており、友人が「異国で無益に（nutzlos）働き身をすり減らして」（53）いると思っている。ただ、友人の方は商売に失敗したと思っていない可能性もある。別のところでは、「ロシアに移って来るようゲオルクを説得しようとしたこと」（46）があると述べられているからである。「ペテルブルクで支店を出せばどれくらい売り上げが見込めるかを詳しく書いていた」（46）とある。ゲオルクは「その数字はゲオルクの店が現在達成している規模に比べれば微々たるもの」（46）であると言うのであるが、友人の方はロシアでの商売は必ずしも悪くはないと思っていることがわかる。商売の発展が何よりも大事なゲオルクからすれば、「微々たる」利益しか上

げられないロシアの友人の商売は失敗かもしれないが、友人は商売の方はそこそこでかまわないと思っている可能性がある。

人との交際や結婚についてはどうだろうか。ゲオルクは、友人が「当地の同国人たちの集団とまともな結びつきを持っておらず、またロシア人の家庭との社交もほとんどなく、一生独身のままでやっていくつものよう」(44)だと推測している。交際や結婚を重視するゲオルクにとっては独身であることはきわめて否定的なことなのであるが、友人にとっては人との交際や結婚よりももっと大事なことがあるのかもしれない。

ロシアの友人を突き動かしている根本的な生の原理がなんであるかを示唆している部分がある。それは聖職者のエピソードである。三年前にロシアから一時帰国した友人は、「ロシアの革命についての信じがたい話」(54)を語る⁴⁾。それは友人が「キエフに出張したときに暴動があり、一人の聖職者がバルコニーに立って、手のひらに大きく血の十字を刻み、その手を上げて人々に呼びかけたという話」(54)⁵⁾である。唐突に差し挟まれるこの聖職者のエピソードは、一見すると物語全体とは何の関係もなさそうに見える。これまでの研究でも物語のテーマと結びつけて論じられることはほとんどなかった⁶⁾。しかし、このエピソードは、ロシアの友人がどのような関心のもとに生きているのかを、作者がそれとなく読者に示唆している箇所であると考えることができる。ロシアの友人は社会問題に対して強い興味を抱いているのである。ロシアの友人からこの話を聞いたゲオルクの父親は、その後この話を「あちこちで語」(54)る。息子の友人が語る聖職者の行動に感銘を受けたのである。ところがゲオルクの方はこの話に特に心を動かされたようには見えない。ゲオルクはロシアの友人が関心を抱いていることには興味がない。

このように、ロシアの友人はゲオルクとは正反対の考えを持っており、ゲオルクとは別の原理に従って生きていると想定することができる。ロシアの友人が関心を持っているのは、ゲオルクのように商売で利益を上げ人生の勝者になることではなく、むしろ、社会がどうなるかということである。友人はだから商売のためではなく、革命に関心を抱くなどの社会的関心からロシアに行ったと考えられる。現存の社会体制の中でそのヒエラルヒーの階段を昇っていくことをめざすのがゲオルクの生き方である。ロシアの友人は、「ロシアの革命」という言葉が示唆するように、ゲオルクとは逆に社会的ヒエラルヒーを解体することの方に関心を向けているのである。

注

- 1) 日本独文学会西日本支部第70回研究発表会(於九州大学, 平成30年11月17日)での口頭発表。この発表を元にした論考は、同学会西日本支部機関誌『西日本ドイツ文学』第31号(2019年11月発行)に掲載予定。
- 2) 『判決』からの引用は, Kafka, Franz: *Drucke zu Lebzeiten*. Kritische Ausgabe. Hrsg. v. Wolf Kittler, Hans-Gerd Koch und Gerhard Neumann. Frankfurt a. M. 1994による。本書からの引用は本文中に頁数のみを挙げて示す。なお、訳は拙訳である。
- 3) 心理学用語で心の防衛機制の一つ。自分の行為や態度, 思考や感情などに対して道徳的に受け入れられる理由づけをして, 無意識的にそれを正当化すること。(氏原寛他編『心理臨床大事典』培風館, 1992)

- 4) 「ロシアの革命」とは「血の日曜日事件」を発端とする、1905 年の「第一次ロシア革命」を指している。これについては、高橋行徳『開いた形式としてのカフカ文学』鳥影社、2003、47-48 頁参照のこと。
- 5) 高橋、上掲書、47-48 頁。
- 6) ただし高橋は、血の十字架は「金儲けと享樂の生活を否定し、自己を見つめ直す、精神的で禁欲的な生活を暗示している」（高橋行徳、上掲書、47 頁）と見ており、ロシアの友人がこのエピソードをゲオルクに語ったのは、「ロシアへの転居によって父親からの完全な自立」（46-47 頁）を果たすことを彼に促すためだったとしている。

Kafkas *Das Urteil* (1)

—Der Kampf zwischen den zwei Ichs—

SASAKI, Hiroyasu

Abstract

Gegenstand dieser Arbeit ist *Das Urteil* von Kafka. Die Hauptfigur, der Kaufmann Georg, hat sich und sein Leben voll und ganz dem wirtschaftlichen Erfolg und dem sozialen Aufstieg verschrieben. Weniger Erfolgreiche und sozial Niedrigstehende werden mit Geringschätzung gestraft. Dies ist die bewusste Seite seines Ichs, die sich im ersten Teil aus seiner Ansicht über seinen russischen Freund herauslesen lässt. Im zweiten Teil kommt die andere, die unbewusste Seite seines Ichs zur Sprache - eine innere Rebellionsinstanz, die maskenhaft in der Person seines Vaters aufscheint und gegen die Egoistik und Egozentrik seines bewussten Ichs aufbegehrt.

Georg ist ein Alter Ego des Schriftstellers Kafka, der unter derselben Persönlichkeitsspaltung litt. Seine Erzählung ist also auch als ein Versuch der Selbsterkenntnis zu verstehen.

【Key words】 Hierarchie, Selbsttäuschung, Rationalisierung, das Unbewusste